

ヒラメ餌料生物の分布状況について

富山県水産試験場

副主幹研究員 小谷口 正樹

1 背景・ねらい

本県では、富山湾沿岸のヒラメ資源の維持増大を目的として、ヒラメの放流事業を実施している。しかし、近年、ヒラメの漁獲尾数に対する放流魚の割合が以前より低下したため、より高い放流効果を求める声が漁業者から上がるようになった。

現在、ヒラメ種苗の放流が行われている海域（氷見市地蔵町地先・魚津市経田地先）の餌料環境を把握し、より効率的なヒラメ栽培漁業の実現に資することを目的に、放流期（7月下旬～8月下旬）において、ヒラメ放流種苗の主要な餌料生物といわれている魚類稚仔及びアミ類の分布状況を調べたので、報告する。

2 成果の概要

（1）魚類稚仔の分布量

氷見市地蔵町地先では、分布密度（重量）が経時的に高まる傾向が見られ、7月下旬に比べ8月上旬では約1.7倍、8月下旬では約2.6倍であった。魚津市経田地先では、分布密度が低くほとんど横這いの状態で、氷見市地蔵町地先の1/4以下であった。

（2）アミ類の分布量

氷見市地蔵町地先では、アミ類の分布は確認できなかった。魚津市経田地先では、7月下旬及び8月上旬にアミ類の分布が確認されたが、その密度（重量）は非常に低かった。

本県においては、ヒラメの食性が、全長70～80mm前後で小型の甲殻類（アミ類等）から魚類へ転換し始めることが確認されている。現在、本県ではヒラメの放流サイズを全長80mmに設定し、7月下旬～8月上旬及び8月下旬～9月上旬に放流していることから、その時期に魚類稚仔の分布量が多い氷見市地蔵町地先の調査地点の方が、魚津市経田地先のそれに比べ、餌料環境としては良好と考えられた。しかし、放流ヒラメの量に見合う魚類稚仔が分布するか否かは明らかではない。また、魚類稚仔の分布量が、9月頃に多いことが確認されていることから、放流時期を遅らせることを検討する事も必要かもしれない。

3 成果の活用面・留意点

同様の調査を、放流地先毎に実施・評価することによって、餌料環境から見た放流適地を明らかにすることができる。しかし、より正確に評価するためには、放流したヒラメの摂餌率（調査個体中の摂餌個体の割合）、胃内容物重量、肥満度等を追跡調査によって、把握する必要がある。

4 問い合わせ先

水産試験場 栽培・深層水課 担当：副主幹研究員 小谷口 正樹

T E L 076-475-0036

(参考) 具体的データ

・魚類稚仔の分布量

氷見市地蔵町地先における魚類稚仔分布密度は、7月下旬に5.71 g / 100m² であったものが8月上旬及び下旬にはそれぞれ9.81 g / 100m² 及び15.10 g / 100m²と増加していった。魚津市経田地先におけるそれは、7月下旬、8月上旬及び8月下旬にそれぞれ1.32 g / 100m²、1.38 g / 100m²及び1.73 g / 100m² と、氷見市地蔵町地先の各調査時期のその1/4以下と少なかった。

・アミ類の分布量

氷見市地蔵町地先では、アミ類の分布は確認できなかった。魚津市経田地先では、7月下旬及び8月上旬にアミ類の分布が確認されたが、その密度は0.01 g / 100m²及び0.31 g / 100m² と非常に少なかった。

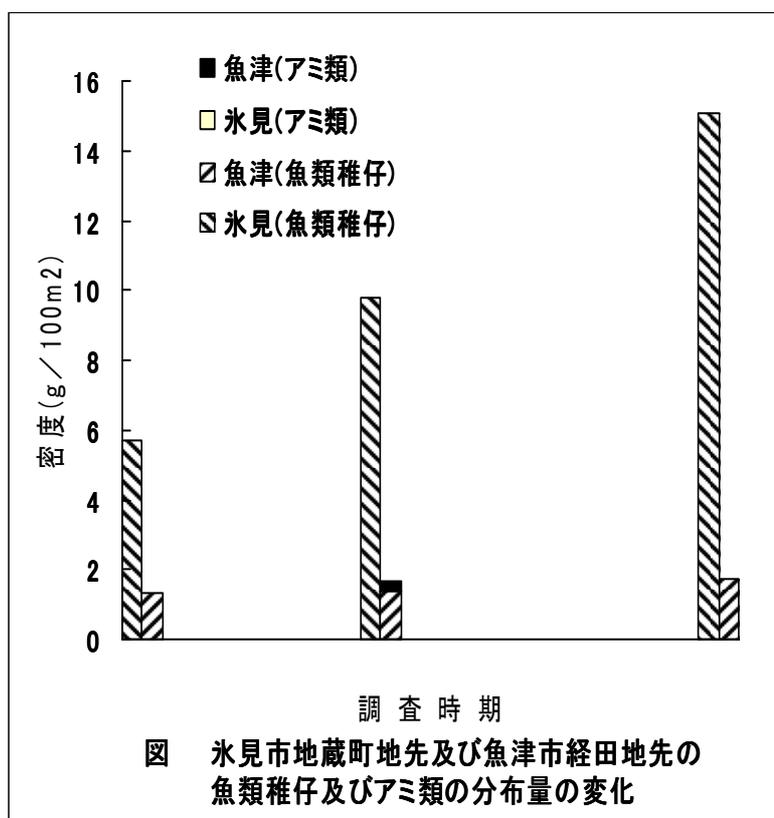


図 氷見市地蔵町地先及び魚津市経田地先の魚類稚仔及びアミ類の分布量の変化

【参考文献】

土井捷三郎 1974. pp. 7-9, 昭和48年度日本海栽培漁業魚類放流技術開発調査結果報告書, 富山県水産試験場

宮崎統五他 1989. pp. 239-248, 昭和63年度放流技術開発事業報告書 日本海ブロック ヒラメ班, 富山県水産試験場

新潟県水産試験場 2000. pp. 新・8-9, 平成7年度～平成11年度放流技術開発事業総括報告書 異体類

鳥取県水産試験場 1999. pp. 鳥1-22, 平成10年度放流技術開発事業報告書 異体類